

私と原三溪

発表者：澤田会員

当会に入れていただく前から、原三溪のことは一般常識程度には知っておりました。①実業家②日本美術院所属の画家のパトロン③「三溪園」の所有者——としてです。何十年前前には、三溪との関係を知らずして富岡製糸場にも行っております。

当研究会では、原三溪と血縁関係にある人を含めてさまざまな人が三溪について調査・研究を進めています。調査・研究もかなりの段階まで進んでいると思いますが、進めば進むほど、顕彰だけでは済まなくもなります。客観的な視点の導入も必要な時期ではないかと考えたことが、今回の発表につながりました。

原三溪は、よくできたいわゆる偉人の部類に属するお人だと思います。さまざまな人がさまざまなことを言っております。

事業に対しては美術以上にえらい。そのえらい事は到底書き尽くせない。（益田鈍翁。「日本近代の三茶人」とも呼ばれる三溪、松永耳庵の頭目格の人。三井物産社長）

一朝何事かある時は、その内に蓄えた真の力を遺憾なく発揮された。（中村房次郎・増田屋株式会社社長）

関東大震災が起こった時は、美術品の購入等は中止して、横浜復興会長となって横浜の復興に一意邁進されました。

支那では昔から最も気品の高い人を「高士」と呼んでいるが、その時、原さんを見て、私は「高士」とはかういふ人のことを指すのだと思った。

実際、原さんは横浜の原さんといっても未だいひ足りない人だった。恐らくこんな偉い秀れた人は、われわれ一生の中には、もう絶対に見ることが出来ないだろうと思われる程不世出の偉才だった。（以上二点、画家・前田青邨）



三溪翁は、徳川時代以来光悦を画家と見る通説に反対して、光悦は芸術上の大指導者であったが、画は殆ど自ら画かず、世に光悦作と称する名画の多くは、実は光悦の影響下に成りたる宗達画であった、という新説を提唱し、(矢代幸雄・美術評論家)

私が物質の補助をするといふのは、君個人の世話をするのではなく、日本画道の為めに世話をしたいからだ。(三溪自身が画家・荒井寛方へ言った言葉)

実在していた人の三溪評で多少批判的な視点からものと思われるのは次のものに限られるように思います。

桃山御殿（現在は巖出御殿と考えられている——筆者注）の生活とこれらの視察（孤児院、行き倒れの病者の収容所等々——筆者注）、之は明らかに矛盾であるが、しかし昔から偉人の行跡を見ると、かういふ矛盾は多分に見られるのであって、先生もやはりその一人であったといへる。(鈴木達治・横浜高等工業学校校長)

三溪批判は筆を自由に運ぶことができる創作の方面に期待するしかないとも言えそうです。『横濱王』（永井沙耶子著・小学館）の中で三溪は次のように描かれています。

噂に聞く限り、女遊びらしい遊びをするわけでもない、酒で羽目を外した話もない。お座敷でちよいと小唄を嗜んで、あとは古物を集めて茶会をしている……何ともつまらない。(横浜の場末のチャブ屋街でバーを経営している元娼婦の「お蝶」の言葉)

欠点がないところが欠点ということができそうな原三溪。もっとも婿養子としては満点に近かったことでしょう。

原三溪はその足跡を、小説のように横浜だけにではなく、出身地の岐阜、富岡製糸場がある群馬にも留めております。信長のような「日本王」ではないにしても「半日本王」くらいにはなることができる資格は十分にあるように思います。

(澤田繁春)

三溪園「名人石」を追って…中間報告

発表者：廣島会員、小島会員

小島会員所蔵の古絵はがきによると、三溪園には名人石と呼ばれる巨石がありました。それが今もあるのか、あるとすればどこなのかを突き止めるため、廣島会員から三溪園内をくまなく調査した結果が報告されました。さらに小島会員からは、名人石の隣に写っていたのと同じ石を数日前に発見したというタイムリーな知らせがありました。本当にそれが写真の石なのか、そして用途や産地は明らかになるのか、今後の展開が期待されます。

